

まえがき

この題名は全作品の中から一部分を抄出したものという印象を与えるであろう。そうとるのが普通である。しかしここでは少し異なったところがある。部分を現していることはその通りだが、実は抄出したのでなく、これだけしか採集できなかったのである。未採集の部分の方が多いのかも知れないが、集め得たものを並べてみて、かりにこう題したのである。

短歌については作者が自分でまとめた歌集『霽日』（大正十一年）があり、『現代短歌全集』第五卷（筑摩書房、一九八〇）にも収められている。ところが作者が定型を捨ててから後の作品は少数のものが著書に再録されただけで、集録したものはない。この作者が主宰した新短歌の同人雑誌の一つに新短歌集の計畫があつて、『石原純集』も予定されていたが刊行された形跡はないようである。

われわれは石原純の科学的業績を調べることから出発して、ついでに文学的作品についてもせめて作品目録くらいは作っておこうということになった。石原純が科学の研究のかたわら長いあいだ親しんできた定型の短歌を離れて、不定形あるいは自由律の歌を作るようになったことについては「石原純と短詩」（二十五周年記念号）で簡単ながら述べてある。

その中で「短詩」という言葉を使ったのは、その少し前に「石原純と短歌」という短い文を他の雑誌に書いたので、それとの対照ということもあるが、石原純の新形式の作品の中に「短歌連作」というのがあるので、これによつたということもある。作者自身も新形式の歌を何と呼ぶか考えが定まっておらず「名称などはどうでもいいのです」という意味のことを述べてもいたのである。

しかし次第に新短歌という名称に落ちついたようである。中野嘉一『新短歌の歴史』（昭和四二年）によると、大正十五年に新短歌協会というものができて、石原純もその創立委員会に出席している写真が出ている。これは新短歌の協会なのか、新しい短歌協会なのか、日本語が不完全で分からないが、新短歌の歴史になればこれはもう明々白々である。

実はこの本は著者から贈られたのであるが、「自由律短歌運動半世紀の歩みと展望」という副題がついていて、第六章に「石原純を中心とする新短歌運動」という約三〇ページの記述がある。石原自身「新短歌」という同人雑誌を主宰した一時期がある。そこでその作品の集録を石原純新短歌抄としたのである。

前にも述べたようにわれわれは石原純研究の一環として新短歌の如きものも考

慮に入れたので、これを新短歌の流れの中に見ようとしているのではない。しかしこれを鑑賞することは自由であろう。ことにこの科学者が研究室を放棄してからは、科学の普及のために功績を残しはしたが、その創造的意欲を満たすに足りる分野がこの新短歌であるのを見れば軽々しく見過ごすことのできないものばかりである。

さてわれわれが集めた作品は次の六五篇である。

\*

- (1) 詩二篇(卯、水)
- (2) 舞台の黒劇(短詩連作)
- (3) 短唱歌編
- (4) 我歌
- (5) 空の斑点
- (6) 高原
- (7) 枇杷山行
- (8) 満州歌
- (9) 夜の聖壇
- (10) 風
- (11) 冬頌
- (12) 黄と黒
- (13) 短章連作
- (14) 春寒い日
- (15) 初夏
- (16) 春のなごり
- (17) 終列車
- (18) 曼珠沙華
- (19) 梅雨の楽譜
- (20) 偏執
- (21) 資本主義的有閑者
- (22) 紙片の区劃
- (23) 童心
- (24) 全反射
- (25) 春の郊外風景
- (26) 感覚の浮揚
- (27) 秋
- (28) 感情の味覚的分析

吉浜真珠庵即興	(29)
メフィストのせりふ	(30)
畸形なる存在	(31)
華麗なる街衢	(32)
啓蟄の日	(33)
作品六章	(34)
歪んだ太陽	(35)
葱、苺、赤いんく、阿片	(36)
チーズ、抒情映画、オゾン、梅	(37)
<b>Tonfilm</b>	(38)
変調	(39)
暑夏の歌	(40)
都会の哀愁	(41)
乱雑な世相	(42)
うつろな感情	(43)
赤風車劇	(44)
陰影を伴ふ風景	(45)
<b>Phänomen</b>	(46)
占籤	(47)
原始的な科学	(48)
光は錯行する	(49)
永遠の火	(50)
ひとつの道標	(51)
<b>Fossils</b>	(52)
社会相	(53)
黒体輻射	(54)
新春の哲学	(55)
人生の問題	(56)
数理の謎	(57)
世界の憂鬱	(58)
ひとり言	(59)
楽譜の言葉	(60)
人と鼻	(61)
複雑怪奇の歌	(62)
高句麗の遺蹟	(63)

(64)

黒く究まる光

(65)

ひとりの偉大なる科学者

\*

このリストは年代順にするのを原則としたが、最後の二篇(64)と(65)だけ例外である。これらは年代からは頭に来るのであるが、次の二つの理由で特別扱いをした。一つは二篇ともかなりの長編でもはや新の字をつけても短歌の連作とは言い難いこと、もう一つは芸術的創作意欲から生れたものではないことである。どちらも大正十一年に山本改造社長がアインシュタイン教授(石原純らは初めアインスタインと書いた)を日本へ招待して講演会を開いたとき、その紹介宣伝のため(64)は『改造』のアインスタイン記念号に、また(65)は『アインスタイン教授講演録』へ掲載されたものである。しかし作者は力を入れてこれらの讃歌を作っており、作者自身も愛着を持っていたことは随筆集『夾竹桃』へ(65)を再録していることから推察されよう。また科学を学ぶものとしては逸することのできない記念的作品である。

ここに集めた作品が発表された雑誌の名称および年代は各作品のあとへ編者註の形で記すことにした。作者は作品の中で自註をつけている所が少しある。そこで編者註はすべて\*印をつけて、作者自身の註と区別した。また作品中の特殊な言葉については余り煩雑にならない程度に註をつけた。それらも\*印をつけてある。以下に作品を掲げる。

(1)

詩二篇\*

卵

一

あをい世戸引きの鍋のなかに  
おほきな卵が三つ煮えてます。

ある空の明るい日、

ひらいた鍋のおもてに

もや／＼と湯気がみえて

絶えず湧き絶えず消えてゆきます。

・  
頻りなる湯気のうごき、

しめりきつたしづかな部屋に

何といふ敏感な

そしてはかない湯気でせう。

ひそかな私のこころが

それに対<sup>む</sup>いて

いひ知れぬ意味を

もとめようとしてゐます、

私の直観に

いま沈黙のうごきが感ぜられます。

## 二

黒く塗った金火箸<sup>かな</sup>で

そつと卵をまろばせてみると、

ぐる／＼ところがって

菱なりにならんだり

またずつと離れたりします。

湯のなかでかちり／＼と

三つの卵が觸れあふ低音、

私はじつとそれを見まもりました。

離れたり觸れあつたり

それがおのづからな

あらはれなのかも知れません。

そうして卵の黄身が

おそらくは偏らずに

まんなかへ落ちつくことができるでせう。

かちり／＼と觸れあふ低音、

殻のいろが白いのや

あかみをたくさん帯びたのや、

私たち人間のやうに

ここにもいろ／＼な姿があります。

濡れとほるたまごの殻に、うつりゐる

障子のかげの歪めるを見る。

湯に浮ける卵に見いり、しみじみと

わがかなしみに觸れゆきにけり。

水

小さな河が冬田のなかをながれて  
海ぎしでふくれてゐます。

その河ぐちに砂がたまつて、

河みづがいつぱいに

みどりいろの蘚や藻をふくんで

じつとふかくたまつてゐます。

西かぜが強くふく日、

満潮のたかい波が砂をこすと

やはらかい砂やまがすつと途ぎれて、

河みづと海のみづとが

お互いに交錯し出します。

しとしと湿りをもつて

くろずんで見える砂のうへに

波がすつと退いてゆくと、

しろい無数の泡くづが

さつとしづかに拡がります。

何といふうつくしい自然の紋様。

河のまみづがその後を趁うて

ゆらゆらと水脈を曳いて

透明にながれ続きます。

河みづと海のみづとの

絶えはてぬ多様の交錯。

河ぐちの橋を渡つて

私はその海ぎしの砂浜をあゆみます、

あるときはふかく

あるときは浅く、

きのうふは向うへ寄つてゐたのに

けふはまるで砂で塞がつてゐます。

風のちからと波のうごきと、  
数へきれない偶然のかさなりが  
この複雑な様態を  
それでも厳確に支配してゐるのです。

それは或る寒い冬の朝でした。  
河みづのしづんだおもてには  
うすい氷が

めづらしくもいちめん張って、

緑青いろをふかくつ、みながら

ところどころに日光を反射して

河ぐちをほそく縁どつた

砂がこひの劃りを隔てて、

いきいきと波うつてゐる

あの洋々とした海のみづと、

何といふ対照なのであります。

海ぎしの砂浜のうへに

冬の平和な陽をあびて

私はそこに立ちながら、

じぶんのころのうごきを

しづかにこまかく辿りてみます。

かたくななひたむきな

併しはにかましいじぶんが

憫れにもまたかなしくも省りみられます、

藍いろにひかった海のみづが

響きのこもつた潮とともに

いま私のあしもとに

こもごもたかまつてまゐります。

やがては乾いた砂をこえて

河のまみづに

交錯せんがために。

\* 「人間相愛」(大正12・5岩波書店)による。著書に入れる前に雑誌に発表  
したとも考えられるが不明。何れにしても最初期の作品であることは間違  
いない。大正十一年房州保田へ移ってからの作品である。

(2)

舞台の黒劇(短歌連作)\*

変災よ、

汝の翼は何がゆゑにしかく黒く、

そしてしかく広くひろがるのであるか。

絶大な恐怖、

人間はいまそのまへにおびえてゐる。

大地の激動

そして人間建設の一切の破壊、

そのおほいなるエネルギーよ

一瞬のあひだに、

都会は絶滅に帰してしまふ。

騒音、悪魔の声、

世の終りが

いま私たちの前に具現しやうとするのか。

眼を瞑らう。

耳を蔽はう。

しかし船暈の気味わるさが

私の全身を襲ふ。

悠久なる自然は

しかも朝とゆふべを、日と夜とを

変りなく地上に現ずる。

震動を感じない微小な生物は

常の如く生の歓喜をうたふではないか。

きいきい響くのは、

あれはうつ梁を挽いて

壓死者をもとめる金属の嗟嘆の声か。



両手を組んで膝をまげて、  
血まみれなその顔貌。

あゝ、惨ましい生命の犠牲。

大地の震感、若し然ういふものがあるとするなら、  
かれは固よりこの異変を意識してゐるであらう。

異妖な暗雲が空を蔽うて、

私たち人間のために、

災後のゆふべを葬ふやうにみえる。

私の踏む両脚はまだふるえてゐる。

愛するものよ、おもへの脚もか。

大震後幾時間、

私たちはまだ安泰な地面を見出さない。

愛、

私たちは本当に愛に生きなくてはならない。

どんな災禍が身をつつまうとも、

そのとき、

私たちは心を安んじていゝ。

白い灰塵が空から降る、

そのなかにのぼる

光輝のない赤繪具いろの太陽。

災後の一夜を山に明かした群じゆうは

きのふの災禍をももの語るのに忙はしい。

潮がいちじるして干てしまつた。

ふだんは見えない海面下の岩礁が

くろく怪しげに尖端をあらはしてゐる。\*  
\*

あゝ、ここにも変化がある。

津浪を虞れて浜辺の人たちが頻りに騒ぐ。

海のかなたの空にとほく火焰が明るむ。

都会の町々はこの夜も燃えてゐるであらうか。

あゝ、有形のものすべては  
かくてありし日の佛もなく滅びてゆく。

変災に生き残った肉体が  
その存在を体感するとき、  
食餌が

災後のちまたにもあさらねばならない。

私の掌の飯塊が

これ程に有難味をもたらしたことはない。

「変死者の屍が堆く重なつて」  
うずたかかさ

焰の旋風にあふられてゐる。

河流に逃げ溺れたものも数しれないと、

都から来た人の声はふるえてゐた、

涙をそゝる衆人のなかに。

あゝ、一九二三年九月一日、

深刻なる運命が

私たちの心の奥を剝つて過ぎた。

あらゆる現実の惨態が

黒く舞台に演ぜられてゐる。

(房州の一漁村にて)

\* 「改造」(大 12・12)

\* 一九二三年の関東大震災で房州は土地が隆起した。この歌は目撃した科学者の証言として貴重な資料でもある。

(3)

短唱歌数篇\*

災後一百日

不慮の

おほき<sup>むさほ</sup> 殃<sup>は</sup>ひに

虐<sup>む</sup>げられた

かなしい主都。

あゝ、惨<sup>むくろ</sup>ましいこの形骸、

・  
そこには

あまたの家財とともに

はかなくも親と子が

生きながら焼<sup>は</sup>き葬<sup>は</sup>られた

あかぐろい土がたまってゐるではないか。

・  
おそろしい

火災のおもかげに

おびえたる幾夜のなごりであらうぞ。

災<sup>さい</sup>をうけた人々に

いまかなしい現<sup>うつ</sup>しさが迫る。

・  
見る限り、トタン屋根が

雨に濡れて

くろく寒さうに光つてゐる。

あゝ、災後の町よ。

いま蘇<sup>あえ</sup>るべき喘<sup>あえ</sup>ぎに忙<sup>あそ</sup>がしい。

・  
白板張の小さな家<sup>や</sup>竝<sup>なみ</sup>、

日のまだ暮れきらない夕<sup>ゆふ</sup>を

もうそこに淡い電灯がともつてゐた。

雨ぐもりの空のしたに

この町々はひとり明るい。

・  
汽車の高架線から

私はふたたたび焼跡の町を見た。

災後一百日、

人々は假屋のなかに

しかしがになりはひをいそしんでゐる。

・  
焼け灰のつもりたまつた

なかだかな街路のうへ、

雨のひどい泥濘、

満員の電車を

私はいくたび<sup>たす</sup>佇み過ぎたか知れない。

・  
あゝ、凄惨なるこの災禍、

私もみづからの生活の資を

いまどこに探さうと云ふのであらう。

かくてひろい主都を

終日あゆみなづまねばなるまい。

・  
しづかなお濠端に

柳の並樹があかく枯れてゐる。

焼けくづれた煉瓦が

この路ばたにも<sup>うづた</sup>堆かい。

・  
宮城まへのひろい芝生に

罹災民たちの

しろい天幕<sup>てんし</sup>がならんでゐる。

寒風<sup>かんふう</sup>はその哀音を

この空に日毎鳴らすであらうに。

## 黒い煤

くろい煤、

無数の煙突がはくくろい煤、

私は大阪の郊外をあるいて

黒い煤の一つの世界を見た。

寂寥とした冬枯の原野、

汝は工場の後ろにおかれて

くろい煤を終日浴びてゐる。

けふもうすぐらい太陽が

煙をとほして

わづかに汝を暖めてゐる。

しきりなしに

工場の煙が降る。

塀ぎは水路のまкруさ。

あたりの草はらも

煤ばんでゐる。

楊の樹であらう。

煤ぐるい死んだ幹が

水路のうへに立つてゐる。

ふとい幾つかの電柱とならんで。

この漲つた煤煙のなかに  
工夫がトロを押してゐる。  
すさんだ

草原をめぐる

竹やらひの墻かきもさみしい。

・  
くろい黒い煤の世界、  
たまたまそこをゆき過ぎた私は  
ふと顔を拭いて  
煤のくろさに  
いまさらに驚いた。

ちびきつた箒のやうに

薄穂すくまほがくろくみち端に残つてゐる。

それもあまりに当然の姿であらう。

しかも薄なればこそ

この煤に充ちた空気の中に

あはれな実みのりをも

ひとり生き遂げ得たのであらうに。

### 雪ふる朝

降りそめた

雪のまだらを

川ぐち、

漁舟ぎょしゅうが

ひつそりとならんでゐる。

・  
汽車のはく

しろい蒸気が

雪ぞらに

淡く消えてゆく。

大つぶの雪がしろい。

震災地の

傾いた雪やねのもとに

あかい焚火たきびがもえてゐる。

農家のひとたちが

いま朝飯あさいひを炊くのであらう。

車窓外の

うすじろい雪ぞらに

車内の黄きいろい淡い灯ひが

ほつかりと

硝子しょうじごしにうつる。

乾かびた寒さむいこがらしに

まつくろに氷こつてゐた

渚しづが、

いま雪ゆきの日に

くろぐろと塩水しほみづをたゝえてゐる。

さびしい雪の平野ひらがつづく。

停車場ていしやうごとに

傘かささした人ひとたちが

ざはざはと乗り降りする。

夜のまだ暁あけきらないのに

家いへを出でて、

私はこの雪ゆきの日ひを

講演に来た。

Y子\*\*よ。我孫子はかなり寒い。

\* 「日光」(大13・4創刊号)。

\*\* Y子は阿佐緒の愛称ユリコ(鈴木伊三郎氏による)。



（4）

我歌\*

暖國

ほかほかとけふは暖かい。

暖國だんこくの空のいろの

明るくふかいなかを

ゆたかな心で私たちはあるいた。

菜の花がもうすすつかり黄いろい。

海浜かいひんのしづかな町の

砂ぶかいさくさくとした路を

私たちは連れだつてゆく。

垣根の椿の花があかい。

草ぶきの農家が

垣をめぐらして続いてゐる。

もの静かな昼。

家ごとにならず見る

乳牛ちゅうしのみごとな姿。

ごつごつした石道みちをふんで

山腹さんぶくの

ひっそりとした寺へのぼる、

多羅葉樹たらえふじゆの葉が

つやつやと光つてゐる。

・ 谿あひの常盤木に

海でりの夕陽ゆふひがあかい。

切り出した石材せいかいを

人夫りんかんがはこぶのであらう、

・ 林間にきいと音する。

風のない海べりの暖かさ。

さらさらとした砂浜に

防風の葉が

ともしくも見いだされる。

#### 蔬菜促成

むつとする暖かさ、

蒸気が硝子面がらすめんに充ちてゐる。

質素な温室内に

・ 胡瓜の黄いろい花がさく。

暖かい日光の

照りなごむけふは春の彼岸。

百度ちかい温室内に

・ 胡瓜がやはらかく実つてゐる。

震災で潰れた主屋おしやの

茅屋根がそのままに地ちに伏さつてゐる。

蔬菜の促成栽培に  
冬をみじかく過ごしながら

この家の女等おんならははたらいてゐる。

親しみぶかい気分で

私は蒸気のとつ温室のなかにはひつた。

私のめがねが

いま曇つて見えない。

荒れすさんだ震災後の町に、

ここのみは

蔬菜いさいきの生々と

あをい葉を伸ばしてゐる。

白く粹どつた硝子屋根のしたに。

#### 早春

沈丁花ちんぢやうげが

硬い花びらをさかせた。

高貴葉のやうな匂ひ。

撓たわめても折れない黒い枝も

この花にはふさはしい。

春ながら

乾ききつた日が続く。

ふりさうでふらない。

きのふもけふも

寒い風が空にふく。

石油ストーブにのせた  
葉罐はかんが

じいじいと暖かさうに鳴つてゐる。  
椅子を向ひ合はせて

Y子が

私の春帽子を編んでゐる。

夜は書齋の

窓のレースが灯に白い。

鉢植のゼラニウムが

薄紅いろの模様を

壁に印してゐる。

外は寒いのか。

ガラスは蒸気にくもつてゐる。

今夜わたしは

ボルツマンの科学書を読んだ。

北から南へと

雲がしきりにうごいてゐる。

樹の梢のゆらぎ。

どことなしにやはり寒い。

彼岸後の春。

蜜柑の味も

目立つてあまくなつたではないの。

もう火鉢の要る

春寒い夜も

少ないことであらう。

未來派模様

地震で劈ひびわれた壁に

私は細い紙きれを張った。  
ふしぎな未来派模様。

私は心の楽曲がつきょくとして

けふもそれを眺めてゐる。

電鈴でんれいをとりつけようとする銅線が

白い壁に

塗りのこされてさがつてゐる、  
未完成な部屋の一つの味ひ。

彼女のしなやかな手くびに

やや目立つ痣あざのあと。

「セルビヤ半島」と

彼女がにこやかにいふ。

みどり、緑、みどり、

緑の部屋、  
夜の部屋。

私はそこですづかに眠る。

電灯のかさもあをい。

窓のカーテンもあをく垂れてゐる。

閉ぢきつたこの部屋で、

彼女が私にひそかにささやく。

風呂あがりに

あかばんだ皮膚ひふ。

私はきもの持ったまま

私の寢室に來た。

五十燭の電灯があかるい。

黒假塗くろにすで塗った板の扉とびらが

まつしろな壁に挟まれてゐる。

くろい扉が

しろい壁よりも

ひそかながら光つてゐる。

\* 『日光』(大正一三年五月)。